

14. 萩焼窯元 田中講平先生の 新しい「陶房葉月」を訪ねて

hazuki0.htm 2002.5.5. by M. Nakanishi



萩焼窯元 田中講平先生 新しい「陶房葉月」 正面で

田中講平先生の作品から

2002.5.5.

昨年秋 美祢市を離れ、この山口市吉敷に新しい「陶房葉月」を開き、
益々ご活躍の萩焼窯元 田中講平先生
私たちも美祢を離れ、すっかりご無沙汰していましたが、
新しい山口の「陶房葉月」を訪ね
いつも変わらぬ田中先生ご夫妻の歓待に感激



田中講平先生の新しい「陶房葉月」とその背後の竹林 2002. 5. 5.

秋吉台のカルスト台地から南東の山口へ山並を走る国道 435 号線。その山口に入る手前に山口市のシンボル鳳凰山がある。



この鳳凰山を抜けて山口へ下った山裾が吉敷。瀬戸内からは小郡から国道 9 号線を北へ山口に向い湯田温泉で道を西に山へ向う国道 435 号線に入り、山にかかる所。東に広い山口市の市街地が広がる静かな山裾の集落が吉敷である。

昨年秋 美祢市を離れ、この山口市吉敷に新しい「陶房葉月」を開き益々ご活躍の陶芸作家 萩焼窯元の田中講平先生。

私たちも美祢を離れ、すっかりご無沙汰していましたが、新しい山口の「陶房葉月」を訪ねまだ、陶房の立ち上げにお忙しい中 いつも変わらぬ田中先生ご夫妻

の歓待に感激。

陶芸の最高峰 「日本伝統工芸展」や「日本陶芸展」に昨年までもう入選も連続五回を重ねられ、新しい作陶を次々発表され、もう大陶芸作家の風格。でも いつもおおらかでわけへだてのない先生ご夫妻。先生の代表作 澄んだ青白磁の中央でそっとお互いに寄り添って流れる列状文様の大皿の美しさそのまま。そして今度訪ねると新しい技法を取り入れた萩焼きでさらに連続入選されたとか・・・

14.1. 田中講平先生の新しい「陶房葉月」を訪ねて 山口市吉敷



鳳翽山の山裾の竹林と森を背後に鳥たちが声をかける静かな林の中に立てられた新しい「陶房葉月」。素晴らしい場所と陶房を得て 益々新しい創作が生まれて行くことでしょう。

「裏の竹林と森に朝 鳥たちがきて 木々のにおいが素晴らしい。次はこの林の斜面に登り窯を・・・」との先生の話や既に新しい工房での陶芸教室がはじまり、多くの生徒さんが楽しく取り組んでおられる様子などを聞いたかつて陶芸教室の生徒の家内。「すぐにも参加したくて本当にうらやましい。」と・・・・・・・・・・。

「陶房葉月」の 陶芸教室



田中講平先生 作品 飾棚 より 2.002. 5. 5



「陶房葉月」の新しい窯を開くにあたって、作陶に賭ける思いもあって『左馬茶碗』を初窯で焼いた」
とうかがい、「陶房葉月」の初窯で焼いた田中先生の「左馬の茶碗」をいただき、「左馬の茶碗」の由来
やこの茶碗に賭ける作陶の思いなどをうかがいました。



「左馬の茶碗」の由来は色々あるようですが、縁起もので陶芸の世界では新しく窯を開いた時に馬の絵や漢字「馬」を右向きに茶碗に描き、その初窯で焼いて世話になった人やお客様等関係者に配るならわしがあり、この茶碗を使うと脳梗塞や脳血栓などの病気にかかりにくいとの言い伝えがあり、縁起の良いものとさ

れているとのこと。

『右向きの馬を書くと しっぽやたてがみを描く時 右から左へ逆方向に絵筆を走らせねばならず 描きにくい技法で絵付けの技量を競った。作陶家は自分の腕をこの「左馬の茶碗」で誇り、作陶の願いと心意気をこの初窯「左馬の茶碗」にこめる』のだそうです。

技術屋のステイタスにも合い通じる話です。

最初の窯で焼く数も少ない貴重な『左馬茶碗』。 大変なものを貰ったと感じています。

田中先生夫妻にはいつも新しい創作へ息吹きを感じ、また楽しい語らいに気分リフレッシュで帰ります。
次 お会いする時がまた 楽しみです。

久しぶりの山口 田中講平先生の「陶房葉月」を訪問して

2002. 5. 5. M. Nakanishi

14.2. 「萩焼について」

萩焼窯元 陶房葉月 日本工芸会員 田中講平

hazuki01.htm



伝統を誇る萩焼は 先人陶工のたゆまぬ精進にはぐくまれ、茶陶はもちろんのこと鑑賞陶器、日常雑器にも高雅でありながら素朴さもあります。

はだ合いはやわらかく、使用しはじめますと次第に色や光沢が変化して、いわゆる「萩の七化」といわれる萩焼特有の持味となります。

私は常に「優雅」を作品に表すことを念願しております。

今後とも、末永くご愛用下さいますようお願い申し上げます。



<陶房 葉月> 田中 講平
萩焼の陶器及び陶器の陶器を作る。製文技法を萩焼に取り入れ、無目列状文法による製作を得意とする。
(萩焼先)
〒753-0811 山口市吉敷1092
TEL:083-932-8405 (0837-93-1001)
見字は書字前。
(葉・工・陶・説明・お茶・手紙)

萩焼窯元 陶房葉月

日本工芸会 正 会 員

田 中 講 平

山口市吉敷 1092 Tel : 083-932-8405

山口市街の中心から車で約 15 分ぐらいのところに「陶房葉月」があります。

山口へ行かれたら 一度 是非 お訪ねください。

2002.5.12. by M. Nakanishi

14. 3. 「左馬の茶碗」



hidari0.htm 2002.5.5. by M. Nakanishi

5月5日 昨春秋 山口市の東 鳳翔山麓の静かな山里 山口市吉敷に新しい窯を開かれた萩焼窯元 日本工芸会正会員田中講平先生の新しい「陶房葉月」を訪ねご夫妻と久しぶりに歓談のひと時を持った。其の折、先生からこの「陶房葉月」の初窯で焼いた「左馬」の茶碗をいただき、同時にこの「左馬の茶碗」の由来やこの左馬の茶碗に賭ける作陶の思いなどについてうかがった。

「左馬の茶碗」の由来は色々あるようですが、縁起もので陶芸の世界では新しく窯を開いた時に馬の絵や漢字「馬」を右向きに茶碗に描き、その初窯で焼いて世話になった人やお客さん等関係者に配るならわしが在るのだそうです。そして、この茶碗を使うと脳梗塞や脳血栓などの病気にかかりにくいとの言い伝えがあり、縁起の良いものとされています。



- 右向に描かれた馬の絵
(多治見・川地商店写真提供)



- 左馬の駒
(天童市パンフレットより)
- インターネット 「左馬」検索より -

萩焼ではこの「左馬茶碗」の慣わしはないようですが、田中先生の出身地 四国「砥部」では新しい窯を開く時に広く行われているとのこと。インターネット検索によれば、「備前」「瀬戸」など各地の焼物の街で広く残っているようです。



田中先生はこの「陶房葉月」の新しい窯を開くにあたって、作陶に賭ける思いもあって「左馬茶碗』を初窯で焼いたと。

田中先生的話では『右向きの馬を書くと しっぽやたてがみを描く時 右から左へ逆方向に絵筆を走らせねばならず 描きにくい技法で絵付けの技量を競った。

作陶家は自分の腕をこの「左馬の茶碗」で誇り、作陶の願いと心意気をこの初窯「左馬の茶碗」にこめる』のだそうです。技術屋のステイタスにも合い通じる話です。

最初の窯で焼く数も少ない貴重な『左馬茶碗』。 大変なものをいただいたと感じています。



表「左 馬」の絵付け



裏「陶房葉月、初窯、平成十三年十月」の彫り 藍色の丸は円で、縁があります様にとの願いがこめられている。

田中 講平先生 の 陶房葉月 「左馬の茶碗」 2001. 10. 初窯

窯や作業場を建立する際、神事を行っていただいた宮司さんに御礼と願いをこめて絵馬のかわりに収めたるのが慣わしともいうそうです。また、山形県天童では将棋の駒を「左馬」に彫る慣わしもあるそうですし、三味線の胴に「左馬」を描くこともあったようです。

この「左馬」の慣わしの由来には諸説あるようですが、「うま」を反対にすると「まう」で舞いの縁起担ぎから来たとか また 馬は寝る時絶対に左には倒れず、「右に出るものがない」の意をこめて左馬に描くとかが由来だそうです。

参 考 左 馬 の 茶 碗 と そ の 由 来【1】

インターネット ホームページ検索より



hidari01.htm 2002.5.6. by M. Nakanishi

備前に限らず他の窯業地でも新しく作られた窯に火を入れる時、右向の馬の絵、又は漢字「馬」を逆字でかいた飯茶碗を焼いて関係者に配る習わしが有ります。左馬茶碗と 言い、これを使うと「中風」にならないと言われ縁起の良い物とされています。



○ 右向に描かれた馬の絵

(多治見・川地商店写真提供) (天童市パンフレットより)



○ 左馬の駒

(天童市パンフレットより)



○ 左馬介湖上渡りの図

(矢先稲荷神社天井絵より)

なぜこのような風習があるのか良くわかりませんが、「左馬」に下記のような諸説があります。

- 古くから馬は神の乗り物として神格化され、神馬として生馬、又は扁額が神社に奉納されました。それが転じて祈願奉謝の印として絵馬を奉納した。

焼物どころでは、工人の手を離れた焼物が無事に焼けるようにと、初窯に火之神に祈って左馬描いた物を焼く。

左馬は、右手が色々な物をつかむところから、不浄とされたので、特に左を選んで描かれたのであろう。

元岐阜県陶磁器陳列館長、故 熊沢 輝雄氏の文から抜粋)

- 縁起物の初窯、左馬茶碗は、韓国・高麗時代鷄龍山の窯場で、沙器と言う鬼神の乗る馬を焼き窯神に供えたのが起こり。

瀬戸では、江戸期始め初窯には必ず手のひらに乗るような可愛い馬を焼き社に供え、文化、文政の頃になると、左馬絵茶碗を焼き、「病魔、中風除け」と言って、知り合いに配ったのが今に継承されている。

(岐阜県陶磁資料館所蔵資料より抜粋)

- 江戸の中期以降に酒席で酌をし、音曲や踊り、話し相手などで宴を取り持った女性、芸者が出てきますが、その人達が持っていた三味線の胴の裏には「馬」の字を裏返しにした左馬が書いてあったそうです。

馬は倒れるとき右倒れになり、絶対左倒れにならないので、左馬を書いた三味線を持つ芸者達も「寝やすい方には寝ない」つまり「芸は売っても身は売らぬ」と言う心意気を示したとの説があります。

それが「格好いい」「粋だ」ぐらいから転じて「縁起がいい」の意味になったのだらうと思われる。

- 「馬」の字が逆さに書かれている「左馬」は、天童で生まれた天童独自の将棋駒です。

このあたりでは、家を新築した方や商売を始めた方への贈り物として重宝されています。というのは、「左馬」は福を招く商売繁盛の守り駒とされているからです。

左馬は「馬」の字が逆さに書いてあります。「うま」を逆から読むと「まう」と読めます。「まう」という音は、昔からめでたい席で踊られる「舞い」を思い起こさせるため、「左馬」は福を招く縁起のよい駒とされています。

また、「馬」の字の下部分が財布のきんちゃくの形に似ています。

きんちゃくは口がよく締まって入れたお金が逃げていかないため、古来から富のシンボルとされています。

(観光パンフレット「天童と将棋駒」から引用)

- 今から約400年前の天正10年6月2日、明智光秀がその主、織田信長を討ち、山崎の天王山に立てこもり天下を取ろうとしました。世に言う「本能寺の変」です。

中国遠征中の羽柴秀吉は、この変の知らせを聞くや直ちに反転して、山崎に光秀を囲みました。光秀の従兄弟、明智左馬介（光春）は安土城を脱し光秀の救援に向かうも、堀秀政にさえぎられて戦場に赴くことが出来ず、馬のまま琵琶湖を渡って坂本城に入りました。

この時、左馬介の愛馬が良く湖上を渡り目的を達しましたので、世に之を「左馬介の湖上渡り」と称しております。

これより巷間では「左馬の・・・」と称して縁起の良いことに用いるようになりました。

この様な「左馬が縁起が良い」説と、「家を新築した際の初風呂に入れば中風にならない」とか「初物を食べれば75日長生きをする」などという素朴な初物信仰が一緒になって、初窯で左馬飯茶碗を焼いて配るという風習が出来たのであろうと推測されます。



- 縁起物の初窯、左馬茶碗は、韓国・高麗時代鷄龍山の窯場で、沙器と言う鬼神の乗る馬を焼き窯神に供えたのが起こり。

瀬戸では、江戸期始め初窯には必ず手のひらに乗るような可愛い馬を焼き社に供え、文化、文政の頃になると、左馬絵茶碗を焼き、「病魔、中風除け」と言って、知り合いに配ったのが今に継承されている。

(岐阜県陶磁資料館所蔵資料より抜粋)

「左馬の茶碗」とは(「馬」の絵(頭が右で、尻尾が左)、又は、「馬」の文字の鏡文字)が書いてある飯茶碗の事。

古来より、馬は神の乗り物として神格化されてきました。生き馬、又は、馬の絵の扁額が神社に奉納され、それが転じて絵馬を奉納するようになりました。焼物では、作者の手を離れた作品が無事に焼けるように、新しく築いた窯での初めての窯焚き(初窯)の成功祈願を願って、左馬を描いた物を焼くようになりました。

瀬戸では、江戸初期の頃、初窯で小さな可愛い馬の置物を焼き、社に供え、文化、文政の頃になると、左馬絵茶碗を焼き、「病魔、中風除け」と言って、配ったそうです。

特に、備前に限らず初窯で焼く飯茶碗は、【左馬の茶碗】といい、これで御飯を食べると、中風にならないと云われ、縁起の良い物とされています。

「左馬」の由来は諸説ありますが、

- * 「うま」を逆から読むと「まう(舞う)」であり、古来、舞はおめでたい席で催される事から、招福の駒として、
- * 「左馬」の姿が「右に出るものなし」とか「左団扇」に通じる大吉兆の形として、
- * 「馬」の字の下部分が財布のきんちゃくの形をしており、口が良く締まって、入ったお金が散逸しない事から、富のシンボルとして、

- * 江戸の中期以降、芸者さんの三味線の胴の裏に左馬（「馬」の鏡文字）を書く。
馬は倒れるときは、右に倒れ、左には倒れないところから、三味線を持つ芸者さんも「寝やすい方には寝ない」つまり「芸は売っても身は売らぬ」と言う心意気を示したところから、これが「格好いい」「粋」というところから転じて「縁起がいい」ということになり、これらから、福を招く、めでたい商売繁盛の守り駒として「左馬の・・・・」と称して縁起の良いものとして用いるようになりました。

この様な「左馬は縁起が良い」説と、「家を新改築した際の初風呂に入れば中風にならない」とか「初物を食べれば75日長生きをする」などという素朴な初物信仰とが一緒になって、初窯で【左馬の茶碗】を焼いて配るという習慣になったと推測されます。

現在では、飯茶碗の他、食器全般につけられる事が多くなっています。

参照：山内厚可氏のHP —（株）備前陶苑—

萩焼窯元「陶房葉月」 田中講平先生の「左馬の茶碗」
〔完〕